

校名：北海道教育大学附属札幌中学校

所在地：〒002-8075 札幌市北区あいの里5条3丁目 1-11 電話番号：011-778-0481

記載日：平成28年5月25日 記載者：三浦 英悟 記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

- 学校教育目標：「清新」「進取」「済正」「親和」
- 校木である藤の花は、開校当時より手入れをして現在も春には、紫の花が咲く。本校のスクールカラーは紫色。
- 校舎は、札幌市の北の端にあり、周囲は豊かな環境に恵まれている。生徒は、ゆったりとした環境の中、学びに対して意欲的に取り組んでいる。
- 「共創の学校」の理念のもと、生徒、家庭、学校と互いが有機的なかかわりをもって学校教育に取り組んでいる。特にPTAの協力が盛んで、数年前に文部科学大臣賞を授賞した。
- 本校は、今年度開校70周年を迎えた。式典には、多くの同窓生が、日本全国、海外からも出席して盛会に実施できた。式典の中で、第2期の同窓生が、現役の生徒に向け、校歌の歌詞に込められた内容や当時の様子について話した。



【中学校の校舎、藤の花】



【開校70周年記念式典の様子】

貴校の卒業生の活躍状況について：

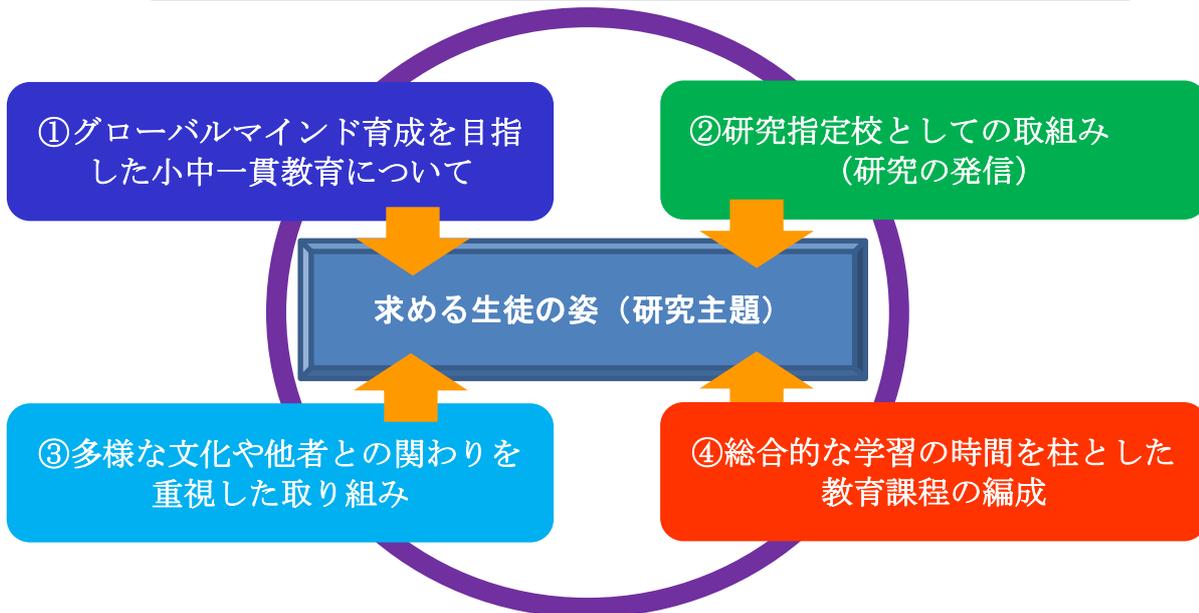
- 1 追跡調査はしていないが、卒業生や同窓会、同窓生通信などから状況を把握している。今年度は、第7期卒業生である日立製作所の名誉会長である川村隆様に依頼し、全校での「道徳」の授業を行った。
- 2 把握した状況は、名簿などで管理している。その名簿は、附属学校で管理している。今年度開校70周年で卒業生の名簿の更新を行った。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

- ① 追跡の調査は特にしていないが全て把握できている。
- ② その情報は附属学校で持っている。
- ③ 附属学校から異動になった先生は、殆どが管理職、または教育委員会で活躍している。先輩方も校長会、教育委員会の中心として活躍している。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

求める生徒の姿の育成（研究）を支える4つの柱



① グローバルマインド育成を目指した小中一貫教育について

本校は、全教科・領域において、共通のテーマのもと研究推進を行っている。おおよそ3～4年を一つのスパンとして、求める生徒の姿を設定し、研究理論を構築している。隣接する附属小学校や特別支援学級の研究連携においては、教科を貫く資質・能力を明確にした授業の系統性を研究の視点と定め、グローバルマインド育成を目指した小中一貫教育の教育課程作成に向けた検討や学習案の検討を合同で定期的実施している。大学教員には、共通テーマの構築、及び、各教科や領域の実践内容を含め、公開研究授業の際の事前指導や授業構築に



【小・中・支援学級 合同の検討会】

協力を得ている。特に、学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間を新たに編成する際も、大学教員に生徒の研究の在り方や探究活動の方法について助言をいただきながら進めている。

② 研究指定校としての取組み

本校は、小学校との研究連携の一環でもあるが、平成25年度から平成28年度まで、文部科学省の研究開発校として「小学校英語の導入と中学校の接続に関する研究」を進めている。これらの成果は、本校の研究大会や、附属小学校の研究会において、具体的な方法や取り組みの成果として発信している。また、保健体育科、音楽科、社会科、理科においても、国立教育政策研究所の研究指定を受け、実践と研究を進めている。指定校の取り組みとして、研究授業



【公開研究授業の様子】保健体育科】

の公開に加え、公立学校教員や大学教員、共同で学習案の検討を行い、市の教育委員会や市内の公立学校の校長先生に助言をいただきながら、研究討議を継続的に進めている。

③多様な文化や他者との関わりを重視した取り組み

本校は、韓国の梨花女子大学附属中学校と、中国の江蘇省塩城中学校と姉妹校提携を結んでいる。それぞれの中学校は、手紙やメールの交換に加え、生徒が互いにそれぞれの学校を訪問したりして、互いの文化に触れ、様々な考え方を知る機会を提供している。これらのことを通して、多角的・多面的に物事を捉える力の育みとなることを期待している。韓国や中国の中学生が来校した際には、本校生徒とともに授業に参加し、言葉の壁を越えて、学びに向かうことの難しさや楽しさを実感している。また、JICAの訪問団や海外の留学生との交流も継続的に実施し、多様な文化に触れながら、自らの文化を見つめ直したり、改めて文化とは何かを考えたりする取り組みを大切にしている。



【韓国を訪問した本校生徒】

④総合的な学習の時間を柱とした教育課程の編成

本校「第3学年の総合的な学習の時間」は、社会問題に目を向け、生徒それぞれの興味・関心のもと、社会問題解決に向けた課題を設定し、フィールドワーク（調査活動等）を基に、自らの結論を導く活動を行っている。例えば、投票率の低い日本の現状を問題視する生徒は、選挙管理委員会を訪れ、投票する年代の統計データを得るとともに、街頭で政治の在り方や選挙についてのアンケートを実施し、政治が自らの生活と深く関わり合っていることへの理解に向けた啓発や、候補者の主張がわかりやすいシステム作りを考察し、討論会で発表していた。又、その発表に対しては、保護者や生徒から多くの質疑があり、みんなで選挙について考える機会となった。

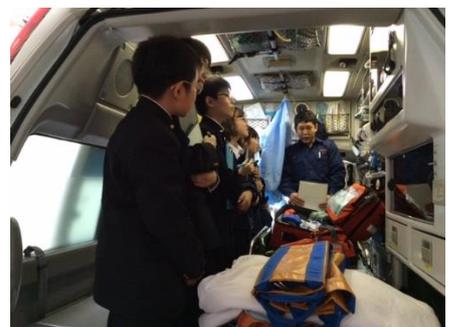
このように、第3学年で課題解決に向けて、自ら必要とする情報を探しに出かけたり、集まった情報から考察し、わかりやすく説明するなどの探究的な学びの価値を実感するために、第1学年では、情報活用のスキルを身に付けたり、第2学年では多様な文化に触れながら、自らの生き方を考える活動を系統的に進めている。



【第3学年討論会で個々が発表する様子】

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

- 本校は、広域からの通学であるため「地域の学校」としての意識が希薄であり、地域住民とのかかわりが少ない現状がある。そのため、万が一、防犯・防災の視点から大きな事故が起こったときに、地域との協力体制ができるのか心配である。そのため、地域住民の方とのかかわりを密にすることを目的に、まちづくりセンターや町内会と連携して、地域の公園などのゴミ拾いや清掃活動などを一緒に行なう取り組みを取り入れている。
- 地域の安全を守っている交番を訪問して、地域の安全についての話を聞く活動も行なっている。



【救急車の中の説明を聞く】

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

少子化に伴い、教員定数が減少の傾向にあることが残念である。画一的な知識の定着を狙うのであれば生徒数に対する教員定数の削減は仕方がない。しかし、これからの子ども達が、大人になったときに必要な資質や能力を学校教育の中でも身につけてほしい願いがある。これからの教育は、まさに量から質への転換期であると考えて本校では以下のような取組を行なっている。

- 大学教員に依頼して、専門的な視点で、直接授業実践をしてもらっている。(教科、総合、道徳)
- 大学教員の心理の専門家(カウンセラー)複数に定期的に来校を願い、生徒の心の発達などについて、予防的な取組をしている。
- これから、教員になる大学生への資質や能力の育成に向けた指導を継続して行なっている。本学の実習指導は、1年(基礎実習)、2年(特別支援実習)、3年(主免実習)、4年(副免実習)、卒業直前実習、教職大学院の俯瞰実習がある。この実習に対して、事前・事中・事後指導を丁寧に行なっている。
- 修学旅行で長崎を訪問したときに、「平和について」の交流をしている。同じ中学生の視点で平和についてどのように考えているのかを共有することができる大変良い機会となっている。附属学校のつながりがあることで可能となっている。



【被爆体験者による講話】



【長崎附属中学校の生徒と流様子】

- 隣接する附属小学校と連携して、小中連携した教育課程を作成し、それをもとに9年間一貫した教育が可能になっている。
- 小学校からの9年間での保護者の連携が強まり、学校教育への多大なる協力を得ている。例えば、父親委員会の活動(校舎内外の環境整備、研究大会の駐車場整理、校舎内のペンキ塗りなど)、PTA活動の充実(学校祭のバザー、研究大会の受付、周年行事関係など)、授業への保護者の協力が盛んである。



【父親委員会による校舎環境整備(ペンキ塗り)】



【開校70周年祝賀会】